

# 天使の骨 1

浅間 一慶



黄金に輝く夕日が鱗雲を橙色に染め、夕空から夜空に変わる黄昏時のグラデーションは、この世のものとは思えないほどに美しかった。全てを忘れさせてくれる景色に、つかの間見惚れていた佳代子は、はっと我に返り、小さな窓から視線を外した。

激しく縦揺れする座席から放り出されないように、両手両足に再び力を入れる。隣の座席にすっぽりと収まり、不安な目で自分を見上げている娘の静香に「大丈夫」と笑顔を見せた。

どこかで悲鳴が聞こえる。

現在、この飛行機は落ちている最中である。

スクリーンにはヨーロッパ北部の地図が映し出されていて、ノルウェー沖の赤い点が、この飛行機の現在位置を示している。目的地のオスロ空港は目と鼻の先だった。

機体が揺れ始め、シートベルト着用の指示が出てから十分は経っただろうか。断続的に続く揺れは激しさを増し、現在機首は右に傾き始めている。時折点滅する照明が、通路を慎重に進む客室乗務員たちの姿を浮かび上がらせていた。

「私たち、死んじゃうの？」

静香の目尻から一筋の涙がぷっくりとした頬を伝い、白いブラウスに小さな染みを作った。胸元につけている小さな蝶のブローチが、涙に濡れてきらりと光る。

「ううん、死なない。ママがついてるもの。安心して」

佳代子は無理やり笑顔を作り、娘の小さな手を握りしめた。

まだおもちゃのように幼く柔らかい五歳の身体は、驚くほど熱く火照っていた。始まったばかりの生命が滾っている、そんな感じだ。

——それなのに、この子はもう命の危機を悟っている。

唇を堅く結び、自分の言うことを素直に聞く健気さを見て、佳代子は胸が締め付けられる思いだった。

「静香、天使たちに祈ろうか。助かりますようにって」

「天使たち？ 神様じゃないの？」

「神様はいるかどうか分からないけど、天使は本当にいるかもしれない。静香も知っているでしょ？ ここは天国に近いから……きっと届くはず」

二人は揃って目を閉じた。

昨日の夕方、佳代子の夫から電話があり、二人は急に彼の実家へ行くことになった。

『仕事は今日で終わったんだ。明日からしばらく休みを取れそうなんだけどさ……急で悪いけど僕の実家に行かないか？ 今回を逃すと次はいつ帰れるのか分からないだろ』

フリーのカメラマンであるノルウェー人の夫は、一週間前からブラジルでリオの街を取材していた。少年ギャング団の取材でスラム街へ入ると聞いた時、思わず佳代子は『危ないからやめて！』と電話口で大声を出してしまった。

彼曰く、世界中で刊行されている〈サードプラネット〉という有名なサイエンス誌からの依頼で、これを断ったカメラマンには出会った事が無いと言う。

『だからハニー、裏を返せばこの仕事が終わった時、僕も晴れて一流のカメラマンの仲間入りということになるんだ。僕の夢に一步近づくんだ。君も僕の夢を応援してくれていたじゃないか。……ね、だからいいだろうカヨコ。オーケーしてくれ』

佳代子は電話の向こう側、小さなオフィスの黒いチェアに座っている、夫の困った顔が容易に想像できた。その後もしつこい夫の説得に渋々ながら納得し、彼を送り出したのだった。それがつい一週間前のことである。

そして今日、予定通り一流のカメラマンになったはずの彼とは、オスロ空港で直接落ち合うことになっている。こちらより三時間早い便なので、もう着いている頃だろうか。

夫の実家に行くことについて、佳代子はもとより賛成だった。夫の母は高齢で、いつ会えなくなるか分からないからだ。だから急な提案にも二つ返事です承した。

電話を切った後、すぐに友人と経営している託児所と、通っていた料理教室に連絡を入れてから、静香を寝かしつけ、スーツケースを引っ張り出して荷造りを開始した。全ての支度が整った頃には、深夜三時をとうに過ぎていたが、どうせ飛行機の中で眠れるだろうからと気にしなかった。それから数時間だけ仮眠し、朝の八時には、雪の降るニューヨークの自宅を後にした。

地鳴りのような音を立てて、機体が激しく揺れている。あちこちで荷物入れが開き、乗客の頭上に落ちて、苦痛の悲鳴が上がっていた。

機内アナウンスはなく、客室乗務員がシートにしがみつきながら、落ち着くようにと大声で叫んでいる。子供の泣き声が大きくなり、どこからか祈りの言葉が聞こえてきた。照明は不規則な点滅を繰り返し、乗客の不安を駆り立て、床や座席からはぎしぎしと金属の悲鳴が鳴り響いていた。

佳代子の薄く開いた目には、阿鼻叫喚の光景が広がっていた。先ほどより事態は悪化しているように思える。機体の傾き具合も、角度が増しているように感じられた。

佳代子たちは機体後部の左隅の席だった。窓側に静香、真ん中に佳代子、通路側は空席だ。もちろんエコノミークラスである。

通路を移動していた客室乗務員が、佳代子の横を通り過ぎようとしたとき、一瞬宙に浮き、床に叩きつけられた。助けようにも揺れが激しく、佳代子はその場から動くことが出来なかった。しばらくしてから緩慢な動きで頭を上げた客室乗務員は、何とか自力で立ち上がった。頭を打ったのか、額から血が滲んでいる。

シートベルトがお腹に食い込んで痛かった。絶えず揺れているせいもあって内臓が競り上がってきそうだ。近くの誰かが吐いたのか、胃液の饅えた臭いも漂ってくる。

よほど恐いのだろう、隣の静香は声も出さずに涙を流し、小さな手で必死にシートベルトを掴んでいる。

気が付かなかったが、佳代子自身も涙を流していた。死が迫ってくる状況で、身体が示す自然な反応の一つなのだろうか、この状況で冷静なことを考えたりもした。

静香と目が合い、半ば条件反射で「大丈夫よ」と語りかけた。その途端、堰を切ったかのように静香は声を上げて泣き出し、両手を佳代子に向けて伸ばしてきた。抱っこしてほしい合図だ。さすがにシートベルトは外せない、静香の両手を握り返すことしか出来なかったが、それでも幾分は落ち着いたようだった。よしよしと宥めながらも、母である自分が涙を見せなければ、この子が不安になることもなかったと、少し反省した。

もっとしっかりしなければ。

「怖い」と顔をくしゃくしゃにして泣きじゃくる我が子の首にそっと手を回し、佳代子は顔を寄せた。いっそシートベルトを外して抱き上げてやりたいが、そんなことをしたら、どこかに頭をぶつけて昏倒するのがオチだ。こんなにも歯痒い思いをしたことは、今までの人生で一度もない。

「静香、絵本、読んであげようか」

娘の不安を少しでも和らげるために、佳代子は努めて明るい声を出した。

「……絵本なんかないよ」

多少泣き止んだが、まだひきつけを起こしながら荒い呼吸をしている。

「大丈夫よ、ママが全部覚えてるから。静香の一番好きな絵本、何？ 言ってごらん」

揺れと騒音が激しく、耳元で声を上げないと、お互い聞こえない。

後ろの席の人がついに投げ出されたのか、背中に大きな衝撃を感じた。けれど残念ながら、今の佳代子に他人を案じている余裕は無い。みんな自分のことで精一杯なのだ。

「じゃあ……『てんしのはなし』」

「オーケー。いいわよ」

だいぶ落ち着きを取り戻した静香の頭を、自分の肩に乗せ、佳代子は話し始めた。

「むかしむかし、この星には人間の他に天使が住んでいました。人は地上に、天使は山と空に、それぞれ住んでいました」

頭上から手荷物がいくつか、佳代子の横の通路に落ちてきた。落ちた衝撃で誰かの黒いキャリーバッグの中身が散乱した。茶色の封筒や書類が辺りに散ばった。

「人は天使に海の幸や野菜を、天使は山の幸や鉱石などを。様々なものを交換し合い、仲良く暮らしていました。

ある日、人間の王様が言いました。『わしのかわいい、かわいい王子が、天使を飼いたいと言っておる。ほれ、一匹捕まえて来い』」

機体が急激に傾いた。ほとんど下に落下している感覚に近い。

その時、何かが破裂する音が響いた。右隣の列を見ると、各席の頭上から黄色の物体がぶら下がっている。酸素マスクだ。佳代子もすぐに自分の頭上を確認したが、酸素マスクは出ていなかった。機体がこんな状態なので、システムに不具合が生じたのだろうか。

静かに目を閉じ、佳代子は話を続けた。

「王様の命令は絶対です。すぐに何百人もの兵士たちが山へ向けて出発しました。

そして一週間後、若い男の天使が連れてこられました。王様はすぐに大きな鳥かごを用意させて、王子の部屋へ運ばせました。

初めの頃こそ、王子は喜び、槍でつついたりして、天使を飛ばしていましたが、やがてそれにも飽き、ついには見向きもしなくなりました」

静香は鼻をすすりながら、おとなしく聞いている。

一本向こう側の通路を、銀色のドリンクカートがものすごい勢いで通り抜けた。通り抜けたと言うより、落下したと言う方が正しいのかもしれない。散らばった荷物や座席の端々にぶつかりながら、佳代子の視界から消えたとき、一際大きな音が聞こえてきた。思わず粉々になったカートを想像した。

「王宮の倉庫に追いやられた天使を、毎日世話しているルリという女性がいました。ルリは王家に仕える侍女です。数ヶ月ののち、二人は次第に惹かれあい、やがて恋仲になります。

あるとき、ルリが言いました。

『このかごから自由にしてあげます』

本来なら天空を優雅に舞う天使たち。心優しいルリは、こんな狭いかごに入れられて、辛いだろうと思ったのです」

気付けは窓の外は紫色の光が幾度も瞬き、和太鼓の音にも似た、恐ろしい轟音が絶えず響いていた。打ちつける豪雨が窓をぼやけさせ、外の景色はほとんど見えなかった。先ほどまで晴れていたのに、空の天気は変わりやすい。

この雷雨が致命的なダメージを与えたのか、機体はさらに落下速度を増した。乗客の悲鳴が一際大きくなり、佳代子と静香の身体も激しく揺さぶられる。それでもなお、佳代子は出来るだけ冷静に、そして丁寧に言葉を紡いだ。

「しかし天使はこう言いました。

『僕がここを出たら、二度とルリに会えなくなってしまう。それにルリは罰を受ける』

『じゃあ、私も連れてって』

ルリは天使と一緒にいくことを決意します」

シートベルトとお腹の間に片腕を差し込まないと、身体が二つに千切れてしまいそうだった。それほど機体の揺れは凄まじく、今にも翼が折れ、木っ端微塵になってしまうんじゃないかと、佳代子は恐ろしくてたまらなかった。

静香は引き寄せた腕の中でおとなしくしている。もう、耳元で大声を上げないと何も聞こえない。

落下中の飛行機の中で、手元に無い絵本の内容を娘に聴かせているなんて、人の話なら理解に苦しむかもしれない。しかし、せめて最後の時くらい、静香には穏やかに過ごしてほしい。その一心で佳代子は声を上げ続けた。

「倉庫から中庭に続く長い廊下で、二人は兵士たちに見つかってしまいました。後ろから大勢の兵士たちが追ってきます。二人との距離は縮まるばかり。これでは中庭に着く前に捕まってしまう。

そのとき、天使がルリの前で屈みました。

『ルリ、乗るんだ』

バサバサ、バサバサ。

フワリ……。

天使はルリを乗せて、廊下を飛んでゆきます。

『わあ、すごい』



勢いよく中庭に飛び出した二人は、そのまま上空へ昇っていきます。

冷たい夜風がルリには心地よく感じました。

『もう誰にも邪魔できないよ。行こう、ルリ。二人で暮らすんだ』

『うん』

大きな満月を横切り、二人は夜空に消えてゆきました……」

静香が僅かに顔を上げた。おでこをくっつけながら、娘の瞳を覗いた。静香は涙を流しながら「ありがとう、ママ」と叫んだ。こんなに小さな子でも、もう助からないことに気付いている。

せわしなく点滅を繰り返す照明。

必死で座席にしがみつく乗客たち。

散乱した荷物や機材。

子供の泣き声。

金属の悲鳴。

風を切る音。

油の臭い。

娘の体温。

迫りくる死の恐怖。

佳代子を取り巻く様々な物事と感覚が一瞬、消えた。顔を上げ、辺りを窺う。

すべてがスローモーションだった。音すらも無いことに気付く。

斜め右の前方、ちょうど機体の主翼の付け根辺りから、火花が上がったのを佳代子を見た。周辺の乗客や客室乗務員に火の粉が降りかかり、彼女たちは顔を手で防ぎながら、苦悶の表情を浮かべた。火傷するほどの熱風が佳代子の頬を通り過ぎたとき、周辺の座席ごとその区画が吹き飛んだのが見えた。途端に轟音が佳代子の鼓膜を震わす。

耳が痛いと思った時には、オレンジ色の火球が目前に迫っていた。機内には突風が吹き荒れ、まともに呼吸も出来ない。少しだけ息を吸い込んだら、むせ返るような刺激臭がした。視界の隅で、機体に開いた大きな亀裂から、座席や床ごと何人かが漆黒の闇空へ吸い込まれていったのが見えた。その光景から目を離せないまま佳代子は、シートベルトの許す限り身を振り、静香を包み込むように強く抱いた。

「ママ！」と自分の胸辺りから、娘の叫び声が聞こえた。

爆発音と風の音と叫び声が奏でる、絶望のシンフォニーの中、もしかしたらそれは幻聴かもしれないなかったが、もはやどちらでもよかった。佳代子は「静香！」と応じ、力強く叫んだ。

それが最後の言葉だと覚悟して。

脳裏に映像が浮かんだ。

狭い台所で焼き菓子を焼いている母。

背広姿の険しい顔をした父。

昔飼っていた白い犬のコロ。

小学校の友達と夕暮れの公園。

高校の体育館、バレー部だったときの練習試合。

大学のなんでもない授業風景。

成人式、晴れ着を着るところ。

初めてのニューヨーク。

タイムズスクエアで夫に出会ったとき。

結婚式、ドレスと指輪、夫の幸せな笑顔、友人たち、両親の涙。

静香の誕生。

三輪車で遊ぶ静香。

三人で撮った家族写真。

夫からの電話、カレンダーの印。

空港のロビーでコーヒーを飲み、二人を待つ夫の姿……。

パラパラ漫画のように、様々な情景が次から次へと、一瞬のうちに流れていった。

顔を上げるとそこには、激しくうねる炎の波が迫っていた。

佳代子の思考はそこで途切れた。

星一つ出ていない漆黒の空と、それを映す黒い海が、赤々と燃える炎によってぼんやりと浮かび上がっている。波のない、穏やかな沖合いの海だった。大粒の雪が激しく降っている。

炎に降り注ぐ雪の光景は、幻想的で美しいが、残念ながらそれを見ている人間は一人もいなかった。

点々と海上に漂う炎は約一キロの広範囲に渡った。方々で上がる炎の光に集まった小魚が、時折水面から跳ね上がり、弓なりに反った腹を赤く染める。

佳代子と静香の乗った飛行機は空中で爆発し、無数の火の玉となって、この海域に降り注いだ。もはやどこの部分か分からない機体の破片が、音も立てず静かに漂い、その合間に数体の亡骸が、当たり前のように浮いていた。手荷物や形の分かる機材は、ほとんど見当たらない。爆発で燃え尽きたか、海の底へ消えてしまっていた。

海上で燃え続ける炎が時々思い出したように爆ぜるだけで、それを除けば辺りは静寂に包まれ、音を発するものは皆無だった。そこにもし生存者がいて、なおかつ意識があれば、静寂を破るその僅かな物音に気付いたかもしれない。

一体いつ現れたのか、吹きつける吹雪をものともせず、〈それ〉は海上に漂う複数の炎の周りを飛んでいた。まるで何かを探すかのように、何度も同じ軌跡を描いて。

やがて〈それ〉は一つの大きな破片に舞い降りた。機体の側面だったその金属の浮島は僅かに傾き、割れてしまった五つの窓枠から小さな飛沫が上がった。〈それ〉のシルエットは人そのものだ。カシャカシャと何か硬いもので金属を叩く音がする。嫌な音ではなく、むしろ小気味よい音だった。〈それ〉の足音だ。指先には太く鋭い、頑強そうな爪が見える。

しばらくすると、心地良いリズムの明滅を繰り返していた足音は止まり、〈それ〉はふいに屈みこんだ。視線の先には半身が海に浸かり、運よく破片の上に乗っている幼い少女の姿があった。白い体毛に覆われた〈それ〉の手が、そっと少女を救い上げる。

一瞬、〈それ〉の左小指にはめられた金の指輪が光った。そしてそれに応じるかのように、少女の胸元についている蝶のブローチも、海水に濡れてきらりと光る。

少女は気を失っていたが、息はあった。

〈それ〉の手にも、足と同様に鋭い爪があったが、少女を傷付けないためか、今はしまわれている。少女をさも大事そうに抱き上げた〈それ〉は、つかの間瞳を閉じて、瞑想するかのような佇まいを見せた。すると、うなじから伸びているネコ科動物の尻尾にも似た白く長いある種の感覚器官が、ぼうっと緑色に光った。

海と雪と炎の織り成す、幻の広場に立つ彫像は、誰からも見染められることもなく、だがしかし、圧倒的な厳粛さを放っていた。

しばらくして光が消えた。目を開いた〈それ〉は、自らの身長の二倍はある純白の翼を暗闇に広げ、少女をしっかりと抱いたまま、音もなく闇夜に飛び去っていった。